

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

「この分厚い本を読んだけれど、情報量は少なかつた」というぼやきを耳にすることは少なくない。分厚ければページ数も文字数も多いから、機械的に処理される記号の量つまり「データ量」は当然多くなる（もし一文字を二バイトで表せば、本全体のデータ量は「全文字数かける2」バイトとなる）。A、このぼやきにおける情報量とは、データ量とは異なるものを指しているはずだ。平たくいえば「この本の内容は、全然わからないことか、もう知っていることか、どちらかだったの、役に立たなかつた」と述べているのである。B、このぼやきの情報量とは実は「読み手にひつての意味内容の量」に他ならない。まったく同じ本を別の人物が読んで、「ああ、本当に面白い本だった、刺激を受けた」ということも十分あるだろう。データ量は同一なのに、読み手によって、うけとる意味内容の“量”はそれぞれ異なるのだ。つまり、「意味」とは個々の主観世界のなかの存在であつて、C。人間にとつて大切なのは「意味」のほうで、それは0／1の機械的なデジタル信号の量（データ量）と直接関係しているわけではない。「無意味」なつまらない文章をいくら大量に読んでも無駄なのだ。

「情報の海」というとき、われわれは、いつたいそれがデータ量の増大を指しているのか、人間にとつての意味作用のありさまを指しているのか、よく考えなくてはならない。情報学を専攻する大学院生でさえ、両者をよく混同する。たとえば「今のパソコンは動画映像を自由に扱えるようになつたので、人びとにつたえる情報量が一挙に増した結果、社会的影響力がはるかに増した」などと書く大学院生がいるが、ここには、情報学的¹に初步的なミスが含まれている。

巨大スクリーンでつまらない映画を観てもすぐ忘れてしまうが、たつた一七文字の名句にふれて人生が変わることもある。両者はまったく別物である。だから、われわれをとりまく情報環境におけるデジタル・データの急激な増加が、必ずしも濃密なコミュニケーションをもたらすとは言い切れない。Dの娯楽映像や騒がしい宣伝コピー文句ばかりが氾濫するなかで、共感できる意味内容はむしろ貧しくなっていることはないのか。われわれは心の底で、日常世界の片隅で発せられるホンモノの言葉の重みを求めているのではないだろうか。

a タン的にいえば、「意味」とは本来、個々の人間主体にとっての「価値・重要さ（significance）」である。情報は意味作用をもつてゐるが、解釈するのはあくまで人間なのだ。情報は物理的パターンとして脳や、書物や、データベースのなかに蓄えられるにせよ、意味＝価値をそれと単純に同一視する学生は、赤点で落第となる。A



情報を受けとると、心のなかには何らかの意味作用が発生する。自分にとつて興味深いもの、刺激的なもの、重要なものが、意味作用発生のプロセスで自然に選択され、重要でないものや既知のものは、すぐに忘れられてしまう。あるいはもともと認知作用から抜け落ちてしまう。この選択をおこなっているのは、意識というよりむしろ無意識であり、身体である。くだらない例だが、一夜漬けで丸暗記した試験勉強の知識はたちまち消えてしまうのに、全身が震えるほど感動した音楽の響きはいつまでも記憶に残るものだ。□イ

ここで大切なのは、意味作用と関わるのは人間だけではないということである。イヌやネコも、餌、敵、異性などを諸々の知覚（触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚）で認知し、敏感に反応するが、これも立派な意味作用である。身体こそが意味作用発生の原器なのであり、身体をもつ動物は、それぞれの種に特有の意味作用をもとに生存活動をつづけている。

あらためて「意味」と生命活動の関係をとらえ直してみよう。どんな生命体も、生きるために「有意義な対象」を認知し選択するという行為をおこなっている。たとえばカエルは、黒い小さな飛翔物を、餌のハエだと思つてとびつく。もしそれが本当にハエだったら、その選択はただしく、カエルは栄養物をセツ取ることになる。このように、「意味＝価値」とは、選択行為とともに事後的に出現するものなのだ。カエルは、過去にとらえたハエのパターンの記憶にもとづいて目前のハエを認知し捕捉する。それがまた記憶される。こういったカエルの自己準拠的・再帰的な行為とともに、「意味＝価値」が□Eに出現することになる。飛翔体をただしくハエだと「意味」づけたカエルは生き長らえるだろうが、ゴミばかりにとびつくカエルはやがて死んでしまう。要するに、「意味」とは本来、生命体の生存活動（選択行為）と不可分の存在なのだ。

人間の心に生じる複雑微妙な意味作用も、この生命活動の延長上にある。たとえば読書をしているとき、われわれは、自分の記憶している言語的な概念にもとづいて文章の意味を解釈する。そしてその解釈が自分の記憶にフィードバックされ、記憶のなかの言語概念も刻々と変化していく。□ウ 読書体験とは、そういう自己準拠的・再帰的・□Eなるプロセスに他ならない。

IT（情報技術）は日夜進歩している。だが、同様に情報処理をしているようでも、コンピュータと人間とのあいだに、本質的な違いは歴然とある。身体がなく、生きているわけでもないコンピュータの内部に、人間のような意味作用が発生し、喜怒哀樂の感情が出現することなど、^(注)鉄腕アトム好きの見果てぬ妄想である。コンピュータとは、人間が外部から与えた□F（算法手順）にしたがつて論理記号を操作し、人間の意識的な思考を高速で模擬するシミュレータであり、

(注) 鉄腕アトム：十萬馬力の出力と人間のような感情をもつロボット少年・アトムが活躍するSF漫画。手塚治虫原作。

それ以上でも以下でもない。いかに有用でも、原理上の限界があるのだ。

生命体も機械も「システム」である。システムとは、互いに関連する多数の構成素からできていて、何らかの作動をおこなう存在だ。実は生命体と機械がシステムとしてどう違うかについては、昔から学問的論争がつづいてきた。そして、両者の相違をあざやかに示したのは「オートポイエーシス（Autopoiesis）理論」である。

「オーム（auto）」とはギリシア語で「自」のいぶ、「ポイエーシス（poiesis）」いは「制作」のことだ。だからオートポイエーシスとは「自分で自分をつくるいぶ」に他ならない（「自己創出」などと訳されるいぶもある）。生命体が自分で自分をつくりあげるシステムであることは明らかだろう。われわれの脳細胞も、脳細胞からできあがる。脳のなかの記憶もまた、過去の記憶をもとに更新され、蓄積されていく。そこには自己準拠的・Eな作動が繰り返されている。誰かが設計図を引いて、外部からプログラムをつくりこんだ存在では決してない。だからこゝら研究しても、生命体の生産機構には神秘的な謎がのこる。一方、コンピュータのような機械システムは、基本的に、人間が設計図を描き、電子回路を組み立て、外部からプログラムをつくりこんだ存在である。機械は自分で自分をつくるいぶはできない。いのうに、他者によつてつくれるいぶ、あるいは他者をつくりあげるいぶを「アロポイエーシス」とこら。「アロ（allo）」いは「他者・異物」のことだ。機械は自分自身をつくれないが、人間に役立つ何かを出力生産する。E生命体である人間は「オームポイエティック・システム（autopoietic system）」、機械であるコンピュータは「アロポイエティック・システム（allopoietic system）」といふわけだ。

オームポイエティック・システム（生命体）とアロポイエティック・システム（機械）の最大の相違は何か。——前者は「閉鎖系」なのに後者は「開放系」だとこらいぶだ。

つまり、システム論的にいふと、生命体は閉じていゐのに、機械は開いていゐいふわけだが、これは少し不思議な感じもする。まず、コンピュータのような機械システムが原理的にオープンだというのは当然だろう。入力データが外部から加えられるいぶ、コンピュータは、あらかじめプログラムがつくりこんだメモリ内のプログラムにしたがつてデータを処理し、出力データを生み出す。その機構は明快に分析できるし、完全な開放系に他ならない。一方、生命体である人間は、外部から光や音などの知覚情報を受けとり、それを脳神経で処理して、何らかの行動を起こす——いのうに見なすと、コンピュータと大差ないよう見えるかもしないし、実際、二〇世紀半ばの古典的サイバネティクスではそう考えた。しかしそく考えると、両者のあいだには大きな相違がある。われわれが音楽を聴いたり、絵を観たりしたとき、それを

身体内でどんな機構で「処理」しているのかは解明されていない。同じ曲や同じ絵でも、受ける印象は個人によつて千差万別だし、同一人物でも、体調や気分など種々の状況によつて、感動したりしなかつたりする。他人がつくったプログラム通りに鑑賞しているのではないのだ。そこにまず、閉鎖性につながる不透明性がある。³

実はこの不透明性が、オートポイエーシス理論提唱のきっかけとなつた。創始者マトウラーナは、ハトの目にいろいろな波長の光を当て、視神経の反応を調べていた。ところが、実験の結果、波長と視神経の反応のあいだに、はつきりした因果関係を見出すことがどうしてもできなかつたのである。たとえば赤い光を当てたら視神経のこの部分がこれくらい興奮する、といった明快な結果は全然えられなかつた。もしハトが □ G □ 、辛抱強く調査すればそれなりの因果関係を見出すことはできるはずだが、いつたいなぜ駄目だつたのか。——マトウラーナの出した結論は「ハトの視神経の反応は、過去の体験や記憶にもとづいて内部的に決まつてくる」というものだつた。外部から加えられる光は、単なる刺激にすぎない。ハトは刺激をうけて独自のやり方で反応するが、内部で自己準拠的に作動しているだけなので、外部からうまく説明できないのである。

要するに、ハトは徹頭徹尾、動物行動学の鼻祖^{びそ}である生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキュルのいう「環世界(Umwelt)」、つまり主観的な世界のなかで生きている。その世界は、ハトの生存体験をつうじて自律的に内側からつくれるものであり、外側からの指令で他律的につくられるものではない。だから「閉じている」のだ。

閉鎖系であるオートポイエティック・システムには、開放系であるアロポイエティック・システムと違つて、明確な入出力関係がない。したがつて、外部からその作動を正確に予測することはできない。□ オ □ これは人間の心を思いだせば、誰しも納得するだろう。同じことを言つても、いつもは笑いだす恋人が急に怒りだすこともある。人間はそれぞれ主観世界の住人で、コミュニケーションが常に成功するとは限らない。

先日、都心でクルマがビュンビュンオウ来するなか、赤信号の横断歩道を平然とゆっくり渡つていく中年女性がいたが、その目はどこか遠くを見つめ、急ブレーキの音も耳に入らないようだつた。彼女の心中は、彼女以外には誰にも分からぬ。こういう閉鎖的な不透明性は、複雑大規模なコンピュータにやどる暗部とはまったく異質なものだ。入り組んだプログラムの動作分析はただ面倒千万なだけだが、人間の心の謎は永遠にかぎりなく深い。

むろん、生命体の内部に何らかのルールがあると仮定し、その反応をある程度予測することは可能である。多くの生物学者はむしろそのルールを見出そうとしているとも言えるだろう。だが、そこでの「ルール」は、外部からつくりこまれ

た明確なプログラムとは根本的に違う。生命体が自己準拠的・Eに作動していれば、おのずと習慣性がうまれ、まるでルールにもとづいて作動しているように見えるのである。環境条件が同じなら、習慣性にもとづいて同じ反応を繰り返すかもしれないが、環境条件が変われば、生存するため新しい反応をつくりだす。それが生命体というものなのだ。つねに変化する環境条件への驚くべき適応が、生物進化をもたらしてきたのである。

(西垣通『ネット社会の「正義」』とは何か—集合知と新しい民主主義』による。ただし一部変更した。)

問一 傍線 a～c のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるものをそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- | | | | |
|--|---|--|--|
| <p>c
オウ来</p> <p>ア キオウ症がある場合は必ず医師に相談してください。
ウ 熱中症のオウキュウ処置はぜひとも知つておくべきである。
オ 証拠としてオウシユウされた品は警察署に保管されています。
オ こここの道はオウトツが多いので、あまり自転車で通りたくない。</p> | <p>b
セツ取</p> <p>イ 自然のセツリ
エ セツジツな願い
オ インフルエンザの予防セツシユ</p> | <p>a
タン的</p> <p>ア ダイタンかつ緻密な戦略
イ タンタンと語られる著者の半生
ウ タンイツの元素で構成される物質
エ タンラク的な判断に基づく他者批判
オ 携帯タンマツによるキャッシュレス決済</p> | |
|--|---|--|--|

問二 空欄 A・B に入る語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- | | | | |
|-----|------|---|------|
| ア A | しかし | B | あるいは |
| イ A | しかし | B | つまり |
| ウ A | だから | B | あるいは |
| エ A | だから | B | つまり |
| オ A | たとえば | B | あるいは |
| カ A | たとえば | B | つまり |

問三 空欄 C に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- | |
|----------------------------|
| ア 実社会では無意味な存在なのである |
| イ 客観的に計量できるような存在ではないのである |
| ウ 物理的に抽出できるような存在ではないのである |
| エ 辞書的に定義できるような存在ではないのである |
| オ 現実世界のなかで客観性を得るような存在なのである |

問四 傍線 1 「情報学的に初步的なミス」とは何か。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- | |
|--|
| ア 人々が受けとるデータ量で社会的影響力を評価しようとしていること。 |
| イ 人々にとつての意味内容の量で社会的影響力を評価しようとしていること。 |
| ウ 動画配信技術の発達が社会の発展に直結していると安易に結論付けていること。 |
| エ 「デジタル信号の量」と「受け手にとつての意味内容の量」の区別なしに「情報量」と表現していること。 |
| オ 動画配信メディアの普及が、人々が受けとるデータ量の増加に寄与していると根拠なく断定していること。 |

問五 空欄Dに入る「細部に違いがあるだけで、どれも似たりよつたりであること」を表す語として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 有象無象
- イ 玉石混淆こんこう
- ウ 大同小異
- エ 二束三文
- オ 有名無実

問六 本文には次の一文が抜けている。これを入れるのに最も適切な箇所を空欄ア～オの中から一つ選び、符号で答えよ。

要するに、ある刺激に対してもう反応するか、よく分からないのである。

問七 空欄E（4箇所）に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 一方的
- イ 機械的
- ウ 客観的
- エ 自発的
- オ 循環的

問八 空欄Fに入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア アプリケーション
- イ アルゴリズム
- ウ エビデンス
- エ ビッグデータ
- オ フローチャート

問九 傍線2

「不思議な感じ」が生じるのはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 認知や反応の対象となる外部からの刺激を受容することができるという性質からすると、生命体は「開いている」と見なされそうなのであるが、実際には「閉じている」ものとして分類されているから。

イ 「自分で自分をつくること」を指して「閉じている」、「他者によつてつくれられること、あるいは他者をつくりあげること」を指して「開いている」というように、それぞれ結びつきが直ちにはイメージし難い表現がなされているから。

ウ 生命体を模擬するというきわめて複雑微妙な作動をおこなうことさえも可能であるという点からすると、機械は生命体と同じく「閉じている」と見なされそうなものであるが、実際には「開いている」ものとして分類されているから。

エ 受けとつた情報に応じて何かを出力するという作動をおこなうという共通点がありながらも、生命体と機械が「閉鎖系」と「開放系」という異なる分類をされることが結果的に古典的サイバネティクスの考え方と相容れなくなっているから。

オ 受けとつた情報を内部で処理して外部へと表出するという作動をおこなうという点からすると、生命体と機械は類似しているように思われるが、実際には生命体は「閉じている」もので機械は「開いている」ものという異なる分類がなされているから。

問十 傍線3 「閉鎖性につながる不透明性がある」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア どの種の生命体に意味作用が生じるのかが解明されていないという事実が、生命体が自律的に作動しているという判断の根拠となるということ。

イ 何がそれぞれの種に特有の意味作用であるのかが解明されていないという事実が、生命体が自律的に作動しているという判断の根拠となるということ。

ウ どのように記憶が生命体の脳に蓄積していくのかが外部から観察できないという事実が、生命体が自律的に作動しているという判断の根拠となるということ。

エ どのような情報や刺激が生命体の意味作用に関与するのかが外部から観察できないという事実が、生命体が自律的に作動しているという判断の根拠となるということ。

オ どのように情報や刺激が生命体の内部で処理・解釈されているのかが外部からは観察できないという事実が、生命体が自己準拠的に作動しているという判断の根拠となるということ。



問十一

空欄 G に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 機械だつたら

イ 完全な閉鎖系だつたら

ウ 光に対して敏感だつたら

エ 丈夫な視神経を有していたら

オ 人間並みの記憶力を備えていたら

問十二 意味作用発生のプロセスが関わる事柄の例として適切でないものを次の中からすべて選び、符号で答えよ。二つ以上選ぶ場合は、ア～クの順で答えること。

ア ある音楽に全身が震えるほど感動すること

イ 目前の黒い小さな飛翔体を餌のハエと認知し捕食すること

ウ 一七字の名句にふれて、人生が変わるほど感銘を受けること

エ 論理記号を操作して人間の意識的な思考を高速で模擬すること

オ 巨大スクリーンでつまらない映画を観てもすぐ忘れてしまうこと

カ 読書を重ねるにつれて、自身の言語概念が刻々と更新されていくこと

キ 一夜漬けで覚えた試験勉強の内容が、試験後には記憶から消えてしまうこと

ク 触覚・味覚・嗅覚・視覚・聴覚を駆使して餌、敵、異性などを認知すること

二

次の文章を読み、後の設問に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落の一部に①～⑤の番号を付してある。

英國にある大学の学長たちの団体、Universities UK が、2015年に「英國大学の経済的な役割」と題する報告書を刊行した。その最初のページは次の文章で始まる。「大学は英國経済の中で必要不可欠の役割を果たしている。大学はスキルを高め、イノベーションを促し、投資と優秀な人材を引き付ける。高等教育は、外貨を稼ぎ出す英國の高度成長部門の一つである」。

これに続いて、以下のように根拠となる数字（11年度）が並ぶ。

- ・大学全体で730億ポンド（約10・9兆円。レートは当時。以下同）のアウトプットを生む。
- ・大学全体で37万8250人の直接的な雇用を生む。
- ・大学全体で364億ポンド（約5・5兆円）のGDPを生む。

この事実を踏まえて報告書は「大学はビジネスにおけるイノベーションを拡大し、輸出主導の知識シユウ約的な経済の成長を助けることで、グローバルな市場での英國の競争力を維持することを確実にしている」と続ける。^a

英國政府の補助金が減額される中で、この団体が大学のためのロビー活動を行っていることを考慮すれば、報告の意図は明らかだ。これまでの実績をもとに、大学への投資が経済に貢献している事実を数字で明確に示すことで、大学の重要性を政府や社会にアピールしようというのである。

もちろん、このような外貨を稼ぎ出すことを期待された高等教育「産業」は、留学生が支払う授業料や生活費に大きく支えられている。¹皮肉なことに、そのような留学生^b外貨への依存によって近年拡大・発展してきた英國の高等教育が、今、新型コロナウィルスの感染拡大の影響下で苦しんでいる。留学生の大幅な減少が予想される中で、大学の予算や雇用の縮小まで計画されている。大学教育のグローバル化がもたらした（思わぬ）負の側面と言つてよいが、コロナ^b以前のイギリスの大学が、経済への貢献をアピールすることで、社会や政府からの信頼や支援を得ようとしてきたことは間違いない。

こうした経済的貢献のアピールは個別の大学にも見られる。私が勤めるオックスフォード大学のサイトにはもつと露骨

に、「オックスフォード大学の1ポンド当たりの収入は、英國經濟全体に3・3ポンドのリターンを生み出す」との表現が登場する。詳細に触れる余地はないが、ここでも大学への投資は經濟的に高いリターンをもたらすことが強調される。プラスの実績を数値で示すことで、大学の存在理由を訴える論法である。

これらを踏まえたうえで、次の文章を見てほしい。

「大学のグローバル化の遅れは危機的状況にあります。大学は、知の蓄積を基としつつ、未踏の地への挑戦により新たな知を創造し、社会を変革していくことが期待されています。我が国の大学を絶えざる挑戦と創造の場へと再生することは、日本が再び世界の中で競争力を高め、輝きを取り戻す『日本再生』のための大きな柱の一つです」

[1]

これは内閣府・教育再生実行会議の提言（2013年）の一部である。「日本が再び世界の中で競争力を高め、輝きを取り戻す」ためには、大学の「再生」が不可欠という。「期待」の裏返しとして、「大学は、知の蓄積を基としつつ、未踏の地への挑戦により新たな知を創造し、社会を変革していく」ことができていないとの認識が暗示される。この提言を受けて「グローバル人材」育成をめざす「スーパーグローバル大学創成支援」事業が始まった。10年以内に日本で10校が世界ランギング100位以内に入るのを目指した。それからすでに7年近くが経過するが、周知のとおり、この目標達成に日本の現状ははるかに遠い。

[2]

ここで着目したいのは、日本のグローバル化の遅れという事実ではない。先の英國の報告書との論法の違いに注意を払いたいのである。英國では、大学の経済的貢献の実績を明示し、それをもとに帰納(induction)型思考（事実の積み上げによる判断）を通じ、だから大学への支出増が必要だと訴える。それに対して日本の政策提言は、大学の貢献度への否定的判断（危機的状況）にある）を前提に、だから改革が必要だと主張する。しかも現状の否定的認識の裏返しで、大学が育成してこなかつたグローバル人材をこれから生み出しが改革とされる。ところが、そのような判断の根拠となる証拠は一切示されない。印象論で紡ぎ出されたイメージらしきものをもとにした主張にとどまる。そして、そこからの演繹(deduction)型思考（抽象的理想的からの推論）で、グローバル人材育成（世界ランギングに10校）という政策課題が出される。

この論法の違いは、英國の大学が経済的に多大な貢献をしているのに対し、日本はそうではない、といった事実レベルの違いの单なる反映ではない。日本の政策文書には、判断の根拠の提示も、事実から帰納的に政策を考えた痕跡も見られないからだ。

〔3〕 英国では過去の実績をもとに、その延長線上で大学の存在理由を主張する論法が通用する。大学への社会のリスクペクトが残っているからだ。プラスの実績（＝事実）から帰納された主張は、政府の補助金増額を目指すと同時に、社会に対しても大学への投資がプラスの成果を生み出すことを印象づける。いわば、「大学性悪説」に立つ前向きの議論だ。³

〔4〕 それに対し、日本で大学改革を主導する政府の前提は、「大学性悪説」と言える。大学教育が欠落させてきた欠点をあるべき理想（グローバル人材育成）から照らし出すという論法で改革の目標（理想）が考えられる。それゆえ改革論議は、これまでの大学教育を否定的に見ることから出発する。その裏返しとして、抽象的的理想から演繹した発想で、目標とそれを実現する手段が考えられる。だが、この論法では抽象度を中途半端に保つたままで、目的も手段も具体的に示すことはできない。

〔5〕 たとえば、英語で教える授業を増やすことが、グローバル人材育成につながると改革の数値目標に据えられた。だが、英語力の低い日本人の学生と教師が英語で授業をやつても、質の高い教育にはならない。それでランギングの順位が上がるわけがない。（工七）演繹的＝抽象的にしか考えられなかつたための、目標と手段のちぐはぐさ（実現性欠如）の一例である。

後ろ向きの改革論議は、性悪説に依拠する一面的な大学観と実現性の乏しい政策を生み出す演繹型思考が主導してきた。しかし「危機的状況」と政府から烙印を押された大学に、誰が進んで資金を提供するだろう。政府の補助金が減額される中で、実現性の乏しい改革を進めれば進めるほど改革は〔A〕し、大学人にはト劳感が募る。その結果、社会から大学へのリスクペクトも支援も得られない。

たとえば、国際貢献やビジネスの世界で実際に通用してきたグローバル人材とは、具体的にどのような資質や能力を備えた人たちか。その資質や能力はどこでどのように獲得されたのか。そのような人材は今後どれだけ必要なのか。これらを抽象的ではなく、実績から帰納的に積み上げていく。その中で日本の大学が実際に果たしてきた貢献を、〔B〕。後ろ向きに働く歯車を逆転させ、大学が社会からの信頼を回復するには、世界ランギングのような外部の参照点ではなく、自らに正対する日本の大学像の構築が俟たれるのだ。⁴

日本に大学をつくつて150年近くになる。そろそろ自分たちの地に足を着けた改革論議が必要だ。大学性悪説をはじめとした「神話」に支えられた、その場限りの印象論と工セ演繹型思考に基づく上からの改革に右往左往しないためには、足場を自ら固めていくしか発展の可能性も抵抗の手立てもない。¹

(苅谷剛彦『コロナ後の教育へ—オックスフォードからの提唱』による。ただし一部変更した。)⁵

問一 傍線 a ～ d のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるものをそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- | | |
|---|---|
| <p>a シュウ約</p> <p>ア シュウイツな作品だ
イ シュウネンを感じる
ウ カンシュウを打破する
オ シュウイの様子を観察する
シユウカイに参加する</p> | <p>b コロナ力</p> <p>ア ナベに火をかける
イ カフクはあざなえる縄の如し
ウ 数日のキュウ力を取る
オ 市場がカセン状態にある
オ 結果よりもカティが大事だ</p> |
| <p>c 余ユウ</p> <p>ア ユウシユウの美を飾る
イ 試合をユウリに進める
ウ 現実からユウリした議論だ
オ ユウフクな家庭で育つ</p> | <p>d ト労感</p> <p>ア 感情をトロする
イ セイトカイの集まりに出席する
ウ 帰国のトにつく
オ トカイの喧騒を離れる
オ イトした結果にはならなかつた</p> |

問二 波線 1 「右往左往」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 紛糾した状況を打開するために奔走すること。

イ 予想外の状況をしていらだつてしまうこと。

ウ 解決を見通せない状況を前に絶望してしまうこと。

エ 不安になり情緒が不安定になつてしまうこと。

オ 混乱してあちらへ行つたりこちらへ行つたりすること。

問三 傍線 1 「皮肉なことに」とあるが、著者が「皮肉」と述べるのはなぜか。考えられる説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 英国において、留学生のもたらす外貨への依存は高等教育が発展する要因となつたが、今は逆に、予算削減や雇用縮小が計画される原因になつてているから。

イ 英国において、留学生のもたらす外貨への依存は高等教育が発展する要因となつたが、今は同時に、予算を獲得するための格好の口実になつてているから。

ウ 英国において、政府や社会へのアピールは大学が補助金を獲得するのを容易にしてきたが、今は逆に、補助金の獲得を困難にしているから。

エ 英国において、政府や社会へのアピールは大学が補助金を獲得する一手段となつてきたが、今は逆に、留学生を獲得する一手段にもなつてているから。

オ 英国において、留学生の大幅な減少は予算削減や雇用縮小が計画される原因になつたが、今は逆に、留学生に依存した状況を改める契機になるから。

問四 傍線 2 「演繹 (deduction) 型思考」に該当するものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 可能な限り数的データを踏まえ、結論を導き出そうとする思考。

イ 一つだけでなく複数の根拠に基づき、主張を行おうとする思考。

ウ 対立する二つの意見をもとに、より高次の認識を導き出す思考。

エ 個別の具体的的事実から、一般的法則を導き出そうとする思考。

オ 原理・原則を踏まえ、それを個別の事例に適用していく思考。



問五

傍線3 「[大学性善説]に立つ前向きの議論」とはどういうものか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

- ア 大学が過去に実績を挙げているという前提に立つが、常にその前提を検証することによって真に善なるものへと変えていこうといふもの。

イ 大学が過去に実績を挙げているという前提に立つが、その前提をいつたん保留することで、公平な立場から大学を評価しようといふもの。

ウ 大学が過去に実績を挙げているという前提に立ち、今後も社会悪に立ち向かう人間を輩出していこうとするもの。

エ 大学が過去に実績を挙げているという前提に立ち、今後も大学への投資が社会的成果を挙げることを期待するもの。

オ 大学が善か悪かのいずれかであるという前提自体を疑うことで、結果として大学をよりよい方向に導こうといふもの。

問六 傍線4 「(エセ) 演繹的」とあるが、著者が「エセ」と述べるのはなぜか。考えられる説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 演繹的思考はそれ自体悪いものではないが、日本の政策提言は印象論に依拠した演繹的思考になつてゐるから。

イ 演繹的思考は大学改革の在り方を考える上で適当なよう見えて、実際は効果を挙げることは難しいから。

ウ 演繹的思考は帰納的思考よりも改革論議に適しているが、日本の場合は印象論に頼つた現状分析を出発点にしているため、成果を挙げていないから。

エ 演繹的思考は帰納的思考に比べ、中途半端な印象論に陥りやすいという点において、本物の思考法とは言えないから。

オ 演繹的思考は帰納的思考と組み合わせて用いてこそ、改革を進める推進力となるのであって、どちらか片方だけでは思考が不十分だから。

問七 空欄Aに入る最も適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

- ア ローカル化 イ グローバル化 ウ 実質化 エ 形骸化
オ 民営化 エ 力 国有化 キ 本格化 ク 簡略化

問八 空欄Bに入る最も適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

ア プラス面だけを見つめることで全面的に肯定する

イ マイナス面に光を当てることで根底から否定する

ウ プラス面もマイナス面も含めて憶測を交えずに評価する

エ プラス面やマイナス面といった尺度にとらわれず無視する

オ 大学に対する印象を重視する中で多角的に検討する

問九 傍線5「大学性悪説をはじめとした「神話」とあるが、著者が「大学性悪説」を「神話」と述べるのはなぜか。考えられる説明として最も

適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

ア 性悪説とは、古代中国の思想家・荀子が提唱した説であり、現代に至るまであまりに時間が経過しているため、参考にならないから。

イ 大学性悪説とは、大学性善説と相反するものであるが、大学の性質を根拠もなく決めつけようとするという点では変わらないから。

ウ 大学性悪説とは、大学性善説を批判する立場にあるが、その批判に正当性はあまりなく、検討する価値がないから。

エ 大学性悪説とは、大学を社会に貢献できない存在と捉える説だが、それは何らかのデータに基づいたものではなく、根拠が乏しいから。

オ 大学性悪説とは、大学を社会的要請に応えることのできない悪と捉える説であるが、それは帰納的思考の産物であり、仕方のないことだから。

問十 文章全体を前半と後半に分けるならば、後半の始まりはどの段落か。最も適切なものを①～⑤の中から一つ選び、番号で答えよ。

問十一

次のうち、本文の内容と合致するものには 1 を、合致しないものには 2 を答えよ。

ア 著者は、データを積み重ねる思考法を演繹的思考と呼び、それが英国の大学の採用する思考法であるとしている。

イ 著者は、抽象的理想に基づく推論を帰納的思考と呼ぶが、日本の改革は帰納的思考を採用してこなかつたため、地に足がついていないと批判している。

ウ 著者は、英國の大学の帰納的思考こそが理想的思考法であると断言した上で、日本の政策提言に見られる演繹的思考を批判している。

エ 著者は、英國の大学の議論が大学性善説に立ち、そのことが補助金獲得に向けた社会や政府へのアピールを可能にしていると分析する。

オ 著者は、日本政府の前提は大学性悪説であると考えており、それを打開するには演繹的思考に基づいた冷静な議論が必要であると結論づけている。

カ 著者は、日本の改革議論は大学の現状を否定的に捉えることに端を発すると考えており、今後は印象ではなく、根拠に基づいた判断を行うことを提案する。